

(電纜の電流に等しいが)の爲めに、少い磁束形成が尙ほ一層弱められ、自分自身已に少い變流器の電力が此れで以て又一層減じさせられるからである。

此の地氣繼電器は實地に使つて甚だ善い事が分つた、此れ等の地氣繼電器は瑞典の大きな水力發電所で長年使用して善い結果を得た。此の地氣繼電器の他の所で爲した實際の經驗については Siemens Zeitschrift, 1922年5—6月號217頁及1923年8—9月號410頁に報告されてある。

地氣の生じた線路のその部分を切り放せば、地氣を生じた箇所を發見することが出来るのであるが之は線路を視察するのでは出来ないから故障の箇所の測定で定めなければならないのである。

伯 林 便 り

一般經濟狀態に關する情報

弊社は從來種々の機械に於て當地一般經濟狀態に關する簡單なる報告を御送付申上げ以て貴地華客との御交渉に當り弊社が最も適切なる方法を以て製作に従事せる事就中在外及獨逸側の流布せる獨逸國の悲觀的狀態に關する蜚語に對し事實上の眞相に關する報告によりて之を辯明するを得る様相努め居候 今回は所謂「レンテン」馬克制實施後に於ける一般情勢及經濟界の勃興に關し簡單なる報告を致度存候 即ち「レンテン」馬克制が驚くべき短日時間に實施せられしに拘らず以來商業界並に公私交通上に於て多大なる安靜を招致したる事を報告し得るは欣幸とする處に候 さり乍ら紙幣馬克制より「レンテン」馬克即ち全馬克制に移り代る過渡期に於ては實價が異常に高騰せるは避くべからざる處にして右は畢竟或る危險保證の意味を有する紙幣馬克計算方法より正規の金貨本位馬克計算に移り行かんとする道程に於ける過渡的現象に外ならず候第一に「レンテン」馬克制實施後に於て危惧せられたる獨逸經濟界が新幣制實施の結果その輸出可能性を阻害せられざるやの點に有之候 然れ共之が對策としては總ての方面に於て斷乎として物價低減を行ひ之を斷行するを最も効果多からしむる爲め先づ勞働賃銀の低下を行はざるべからざるは勿論にして伯林金屬工業界に於ては十日間に亘り勞働賃銀低下を行ひたるに此の難事は最初の豫期に反して容易に實現するを得たるは欣幸とする處に候 右は全國民就中勞働者自身に於ても尙且つ此の物價低下に必要を認め居る證左に有之且つ彼等自ら既に全獨逸經濟界の利益の爲めには或程度の犠牲を拂はざるべからざる事を覺悟せる處に候 伯林金屬工業界に於ては一割四分の勞銀低下實施を試みたるに勞働者側は罷工の威嚇を以て之に答へ、又事實上同盟罷工行はれたりと雖も全獨逸勞働者の意向を迎へて單に二日間に亘り罷工をなしたるに過ぎず且つ弊社の業務

上於ても二三その影響を蒙りたるものあるも唯二三時間に瞬時的行はれたるに過ぎず右の次第にて弊社に於ては労働者の罷工は殆ど行はれざりしに等しく候へ共伯林に於ける金屬取扱諸工場（「ルアゲマイネ」電気會社も含む）に於ては事業の大部分は概ね三四日間は全然閉鎖の止むにき状態に有之候 斯くて爭議は沈靜に歸しその結果得たる主要成績としては雇主側及労働者側間に必要なる場合には一日中十時間まで勤務する事を得而も時間外勞銀を支拂ふを要せざることに自由協定を行ひ申候

右は弊社の世界市場に於ける競争能力が截然として重要意義を有することを明瞭に表現する次第に有之候

弊社は以上御説明申上候事實は貴地華客が獨逸國に爲したる注文は今日にては従前に比し最も確實且つ安全に行はるべきを述べ安心を得るに最も適切なる資料を提供する儀と確信致居候 弊社は目下比較的短期日の納期にして事實上之を實行し得る大口注文多數の實例を表に作成中に之有候條出來次第右表を御送付可致候（シーメンス社より）

編輯部より

昨夏日獨提携事業として創立された富士電機製造株式會社が獨特なる技術を輸入しやうとして居るシーメンス・シュツケルト並にシーメンス・ハルスケ會社は 1921 年以來 “Siemens-Zeitschrift” と云ふ月刊雜誌を發行して居ります 其の内容の充實した點に於て將た又貴重な文獻として同種雜誌中に誇るべきものであります我國では獨逸語が充分に普及されて居ないためか輸入部數が甚だ少なく且つ充分讀まれて居ないのは遺憾に堪へない所であります、茲に於て本誌は發刊の辭に社長の述べられた主旨に基いて電氣に關する獨逸式最新の理論的研究、應用的發明を紹介するもので先づ資料の一部を前記の雜誌から採る事に致しました。勿論徒に西歐の糟粕を嘗むるを以て甘んずるものではありませんが唯彼等に學ぶべきものあらば之を採りて我が國學術促進に資すべきものと信じます。我が社は尙創業時代に屬し研究設備はまだ整頓しませんから將來は別として本誌は當分翻譯を主とする考へであります。

本誌は目下の處下記四名が每號編輯執筆の任に當つて居りますが經驗の淺いために内容體裁等に就き改善を要する點が多々あらうと思ひます、讀者諸賢に於ても御氣附の點は何卒御忠言の勞を惜まれざらん事を希望するものであります。

編輯擔當者 石川 清 丹生 谷 進
高橋 松 次 高木 信 廣



*本誌に記載されている会社名および製品名は、それぞれの会社が所有する
商標または登録商標である場合があります。